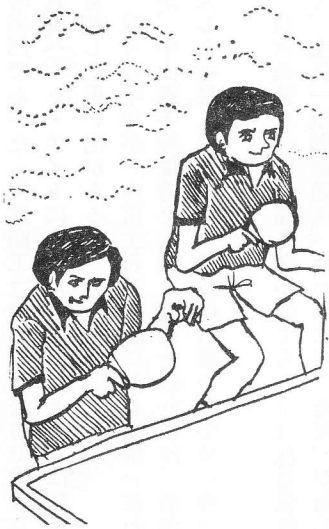


と思われる試合を勝ち進み、三回戦では、中シードの都立一商にも三対二で勝ち、いっぴなく勝ちを意識しすぎて関東商工戦で弱気のオーダーを組んだ事がベスト4進出を果し得なかった原因であったと、今も残念でなりません。アンカーとして絶対の信頼がおけ、しぶとさではナンバー1の村上君を始め、超高校級のスケールを持つサウスポールの渡辺君の、高いとあまり入らないスマッシュとか、自分より弱いと思った人には絶対負けない、安定した力を持っていた安東君と一緒に残っている試合であったと思います。残念ながら、目標としていたインター杯などには、代表選手を送りこめませんでした。二年間に満たない高校でのチーム作りで、ベスト8まで進出できたことは、ある意味で満足できるものであったと思います。



創立三十周年に寄せて

十七期生 青木 建

いざ、我々が西高卓球部在部当時の頃を思い出そうと試みても、始めて卓球のラケットを握り、先輩の後で球拾いをしながら素振練習をした入部当時から、既に、十三年も経ってしまったのかという感慨の方が先になって、なかなか生々とした場面が思い出せない次第である。そんな訳で、漠然としたものしかご報告できず申し訳けないが、思い出すままに、当時のことを若干触れさせていきたい。

我々が、昭和三十七年四月、西高卓球部の門を叩いた時は、我々の一年先輩が部の中心として活躍されており、中村、渡辺、村上先輩等、中学時代から相当活躍された選手が、部の中軸となつて頑張られていた時代であった。我々新入部員の目には、中村先輩の華麗な「バックハンド」、渡辺先輩の豪快な「ドライブボール」、そして、村上先輩の多彩な「ショット・ツッツキ」が、羨望の的として映ったことを今日でも記憶している。

確か、三十七年秋の「高体連新人団体戦」に於て、我々卓球部（主力選手は、前記三選手と安東先輩だったと思う）

が、当時名門であった「関東商工」に、準々決勝で惜敗したが、東京都ベント・エイトに入り、都立高校としては輝かしい成績を残した思い出がある。

翌年、我々の学年が、山広主将を中心に部を引継いだわけであるが、中山選手等優秀な後輩を迎えたわりには、前年に比べて大した戦果も得られず、後輩に引継いだ印象が残っている。

勿論、荻村先輩を始め、諸先輩が建てられた立派な伝統を守るべく、全員一生懸命頑張ったわけだが、ただ、がむしゃらに卓球をやったという記憶が強く、夏の合宿を思い出しても、朝の「井ノ頭公園」一周のマラソンから始めて、夜の「エスカレート・マツチ」(トーナメント方式の対内試合、勝つと順繰りに上位の台で試合ができる。確か男女一緒にやってやった思い出がある。)まで、一日中、ひたすらに卓球に打込んだ思い出が残っている。

何か、幹事の方のご要望に応えられる様な面白いエピソードを思い出そうと努力してみたが、どうも、練習が終ると必ず皆で立寄った「目の出屋」のおばさんの顔ばかり浮んで思い出せないの、駄文はこの位でやめさせていただきます。

最後に、我々にいつも心をかけ、卓球部を盛りたてて下さった、藤崎先生他、諸先生、荻村先輩他、諸先輩に、改めてお礼を述べると共に、我々西高卓球部が、三十周年を機に、増々発展することを願って、終りとさせていただきます。

親睦と熱意

十八期生 中山 雅彦

われわれ十八期生は昭和三十八年四月に西高卓球部に入部、同年十月の西高記念祭の後に部長、マネージャーなど役員交代があり、翌年の十月までの一年間が中心となって活動した時期であった。この後は卓球を続けたい者は残り、勉強をしたいは現役から離れてもよいことになっていった。したがって、レギュラーの構成員は常に一、二年生であり、三年生が残っていることは稀であった。団体戦のチーム編成はA、Bの二チームあったがAチームは全員二年、Bチームは一、二年混合であり、戦力は卓球部の総力というよりも二年生の力によって決まった。

対外試合ではあまりよい成績はなく、高体連の試合はほとんどが三回戦以内で敗退していた。一度だけマネージャーの中山が六回戦まで進み、中シードをとったことがあった。しかし、第三学区都立戦(十四・十六校ぐらいあった)では弱者同志の争いではあったが、常に上位の成績を残しており、満足感を得ることができた。都立戦は二月と十月にあり、十月の大会は二年生にとっては最後の試合であった。われわれ